

7 「山・住」合同分科会 要旨

San-En-Nanshin Summit 2013 in Minamishinsyu

「山・住」合同分科会では、「人口減少時代における地域社会の持続可能性を考える」をテーマに意見交換がなされた。

コーディネーター	豊橋技術科学大学	教授	大貝 彰
報告者	島根県中山間地域研究センター	研究統括監	藤山 浩
行政	浜松市	浜松市長	鈴木 康友
行政	設楽町	設楽町長	横山 光明
行政	高森町	高森町長	熊谷 元尋
行政	阿智村	阿智村長	岡庭 一雄
行政	根羽村	根羽村長	大久保 憲一
行政	売木村	売木村長	清水 秀樹
行政	泰阜村	泰阜村長	松島 貞治
行政	大鹿村	大鹿村長	柳島 貞康
経済	東栄町商工会	東栄町商工会長	井筒 睦治
住民	NPO 法人 三遠南信アミ	理事	水島 加寿代
住民	NPO 法人 てほへ	副理事長	大脇 聡
パネリスト	足利工業大学	副学長	蟹江 好弘

(敬称略)

■はじめに

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

豊橋技術科学大学の私と申します。この「山・住」分科会については、私、ここ3年ほどずっと継続してコーディネーターを務めさせていただいております。今年もまたどうかよろしくお願いいたします。昨年の議論からさらに何か進展があればというように考えておりますので、皆様、何とぞ積極的にご発言をいただき、ご協力をよろしくお願いいたします。

以降、座らせていただいております。よろしくお願いいたします。

SENAの会長で浜松市の鈴木市長様を初め、この分科会の参加者の皆様、どうかよろしくお願いいたします。

まず初めに、本日の進行についてご説明をしたいと思います。

最初に、これは例年同様ですが、前年度のサミットの議論のまとめと今回のテーマについて、事務局から説明をいただきます。それに続きまして、島根県中山間地域研究センター研究統括監であります藤山浩様から、「新たな地域社会の持続性を考える」というテーマでご報告をいただく予定にしております。これらを踏まえまして、今回の分科会のテーマであります「人口減少時

代における地域社会の持続可能性を考える」ということについて、それぞれが取り組まれている事業等についてご意見をいただきたいというふうに思っております。

それでは、早速ですが、まず、事務局から説明をお願いいたします。よろしく願います。

事務局

それでは、前年度の議論のまとめと今回のテーマについてご説明いたします。

前年度の「山・住」合同分科会では、第1期の重点プロジェクトを総括し、第2期に向け、「中山間地域の生活環境向上に繋がる人・ものの交流促進」というテーマで議論していただきました。

前年度の議論をまとめると3点となります。1点目は、三遠南信自動車道あるいは新東名といった道路基盤整備が確実に交流を促進させているということは疑いのない事実であるということから、そういった点を踏まえ、中山間地域の生活環境向上のための方策を検討していく必要があると。ただし、基盤整備が逆に過疎化を促進させるという側面も否めないという指摘もあることから、その点についても注意を払う必要があるということでした。

2点目は、情報発信力が重要である。地域の持つ魅力的な地域資源をこの圏域内外にもっと発信していく情報発信の体制や方法を整備する必要があるということでした。

3点目は、中山間地域の生活を支えるという意味において、三遠南信地域の県境を越えた防災対策の強化や災害発生時の相互連携が必要であるということでした。

そこで今回は前年度示された三つのポイントを踏まえた上で、全国の中山間地において維持が困難になりつつある集落、いわゆる限界集落がふえてきているような時世の中、いかにしてコミュニティーを維持し

ていくか、また、全人口が減少する時代において自治会活動や祭礼などの社会的共同作業の実施が困難になることに加え、大規模災害発生時の共助も期待できない事態が想定されることから、そのような事態に対応していくため我々に何ができるかを議論していただきたいと考え、「人口減少時代における地域社会の持続可能性を考える」というテーマを設定させていただきました。

どうぞよろしくお願いいたします。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございました。

今回のこの分科会のテーマは、非常に大きなテーマというか、なかなか議論が絞りづらいところもあるかもしれませんが、皆様、よろしくお願いいたします。

それでは、続きまして、島根県中山間地域研究センター研究統括監の藤山浩様より、「新たな地域社会の持続性を考える」というテーマでご報告をいただきたいと思えます。

早速ですが、よろしくお願いいたします。

■報告

島根県中山間地域研究センター

研究統括監 藤山浩 氏

それでは、これから皆さんのいろいろな意見交換の材料になるような、今の時代をどう捉えるべきか、それから、どうしても中山間地域は規模の経済が働かないのですね、だから、都市スタンダード、特に東京スタンダードのそういった規模の経済ではない、新しい循環の経済といえますか、そういう発想も必要なのではないかと思うのです。そのあたりを話題提供できればと思います。

これは美しい、私が生まれたあたりの島根の風景でございます。これは「愛の一本

道」と呼ばれていますけれども、未来はこのような、もっと紆余曲折あるのではないかなと思っています。しかも危機は迫っております。私はこれを「2015年危機」と呼んでいますが、中山間地域の2015年危機というのはあと2年ですが、実は、島根はこちらよりもかなり高齢化が進んでいまして、昭和1桁の方が主力世代です。私の親の世代ですけれども、ずっとこの方々が地域の産業や社会の担い手です。

さすがに引退が始まっております。例えば、この右側のグラフの農業の従事者で見ますと、この赤いところが昭和1桁の方です。実は島根県における農業を引退される平均年齢が76.7歳になっています。これはこちら余り変わらないのではないかなと思うのですが、これを超え始めたということですね。ですから、5年後、10年後はごっそりこの世代がいなくなります。

となると、地域社会あるいは農林業はどうなるのか。ただ、これは単に悲観すべきだけではなくて、逆に、次の世代が入るチャンスでもあります。初めてまとまった土地が逆にあいていくわけですから。こういった危機を迎えているというのが一つです。

2番目は、先ほどもちょっと申し上げたのですが、実は、都市の団地がすごいことになっていまして、私、この中京圏のあたりは知らないのですが、中国地方、あるいはそれに先んじて東京、大阪の団地がかなりすごいことになっています。大体こういった団地というのは70年代につくられ始め、80年代に大体入居が終わっています。極めて短期間に同じ世代が入りました。その結果として、団塊世代がその中心ですけれども、団塊世代は2年後に全部高齢者になります。それを契機に爆発的に今、高齢化が起きていまして、全国的にも秋田と並んで高齢化が進んでいる島根県。その中でも高齢化が進んでいる中山間の町村部を2年後

には続々上回ります。

こういった自給率0%の団地やマンションで起きる高齢化というのは、私は逆に中山間以上に厳しいものがあると思っています。人と人のつながりとか、そこでどう老後や死を迎えるのかといった問題が今、噴出してあります。

先ほども言いましたが、逆に、これからは中山間のほうでそういった都市の団地やマンションで足りないところをカバーするような、こういう関係づくりが逆に求められるのではないかというふうにも思っています。

さて、そういう中で、中山間地域は待たなしで定住を実現しなければいけない。とにかく昭和1桁が引退するときに、糊代がある形でバトンをつながなければいけないと思っています。

今、島根では全県の中山間地域、ほとんどもう中山間地域だらけですけれども、227の基本的なエリア、大体小学校区、公民館区の基礎的な生活圏です。ここに分けていろいろなカルテをつくって、現状を明らかにした上で定住の作戦を練ろうとしています。これを県としても支援しています。これが227のエリアで、大体昭和の旧村ですが、平均人口が1,370人、500世帯です。

ちょっと画面ではわかりにくいかもしれませんが、色分けしているのですね。これは4歳以下の赤ちゃんがどこで増えたか減ったか。青いところは10%以上減っています。少子化が進んでいる。ここでは濃い黒になっていますが、濃い色のところがありますね。これは、この少子化の時代にあって5%以上、逆にふやしているのです。この分布を見ると、非常におもしろいですね。私はこういう中山間の分析の専門家ですが、これを見たときに非常におもしろいと思いましたね。なぜかという、5%以上子どもをふやしている分布というのがまるでは

らばらです。一見もう法則性がない。

島根でいう都市部は、この東部の松江、出雲です。こういう大きな都市部に近いほうに赤ちゃんが増えているかという、全くそういった傾向はないのです。むしろこの5年で一番ふやした子ども定住オリンピックの金メダルは、実は美郷町というところ。これは客観的ないろいろな状況はかなり厳しいですね。厳しいですけれども、逆に、もう徳俵に足が乗ったということで、もう定住に向けて具体的な戦略を打ち始めています。住宅をつくり、あるいはコミュニティーを集落支援員や協力隊で強化し、イノシシを初めとしたいろいろなおもしろい産業を興していますね。そういったところは、いろいろな地理的な条件は厳しいにもかかわらず、実は8例中5エリアで子どもをふやしている。これはすばらしいですね。

あと、銀メダル、銅メダルはどこかという、実は離島です。ここが増やしている。銀メダルが西ノ島という、定置網漁業で毎年1組、2組ちゃんと入れている。銅メダルは割と有名な海士町です。ここはかなり、もう人口はほぼ定常化を実現している。むしろ普通に考えたら厳しいところで、逆に今、子どもを実はふやしているという状況があります。

こういったことがありまして、この227エリアで詳細な人口の現状分析と将来予測を役場と一緒に全部してもらっています。

では、どのくらい増やせばいいのかというのも全部割り出しています。これをぜひ三遠南信でもやられてはどうでしょうか。これが処方箋です。これは何粒入れればいいのかという、20代前半の男女、それから、30代前半の子連れ夫婦、60代前半の定年の帰郷夫婦。これをどのくらいふやせばいいのかという、この227のエリア、平均

人口1,370人で2.4組ずつふやせば島根の中山間はずっと続いていきます。もう高齢化率は下がり始め、ほぼ人口も定常化。小中学生の人数もいけます。もうこういうふうには実は結果が出ているわけですね。この2.4組をやるかやらないか。でも小さなエリアでは、本当に1組をふやせるかどうかなんですね。これが島根は542組です。3,794人。これは首都圏人口が3,562万人ですから1万分の1なので、選りすぐりの人々が来てほしいなと思っています。こういう具体的な、県全体としても、圏域としても、あるいは各それぞれの地元でも、単に人口が増えればいいのか、高齢化が下がればいいのかではなくて、具体的にあと何組なのかというのを割り出した上で、やはり作戦を考えると来ているように思います。日本は首都圏に集まり過ぎだと思いますね。非常にこれは災害も含めてリスク、危険もありますね。こういったことをぜひ全国の中山間で作戦を立てて、ここで一緒に暮らそうという定住ののろしを具体的に上げるということではないかと思います。

ただ、誰彼とはなく来ればいいのかというわけではないです。うちの集落も今、この私も入れて、5年間で1家族ずつ増えています。これはすばらしいケースですが、やはりみんなどんどん一緒に草刈りをやってくれるような人が増えるから本当は良いわけで、やはり選ばない地域は選ばれないということだと思いますから、そういう宣言をしていく必要があると思います。

ただ、定住をやるためにはいろいろな厳しい、乗り越えなければいけないハードルもあります。例えば、島根県でも先ほどの227エリアで詳細な、どこにどういう拠点が残っているか全部つくっていますが、ガソリンスタンドが今、激減ですね。もう今やガソリンスタンドがあるところが半分を切ってしまった。こういう状況です。だか

ら、それぞれ分野、縦割りの拠点では人口が減る中で、どんどん実はビジネスが成り立たなくて、減っているわけです。こういったのをどうするかという知恵が要る。だから、大都市に照準を合わせた規模の経済で分野ごと縦割りの仕組みではなかなか保たないわけです。

これは、2007年に当時の広域地方計画との絡みで八つの市町村をモデル的に、一次的な拠点含めて全部の拠点を落としてみました。どこにどれだけ今、残っているのがあるのか。こういった状況を把握しながら、きちんとこれをモニターしていかなければいけない。あるいはそういった拠点の配置、あるいはそこへの時間、距離、これを全部調べました。どういう関係があるのか。そこはどういう定住条件等へ響いてくるのか。こういうのをやりましたが、その一つを紹介しますと、これは一次的な医療、例えば診療所ですね。最寄りの内科医まで何分で行けるかということ、もう一つ、二次医療、総合病院ですね。大体診療科目13科目以上をこれにしましたけれども、これで一次医療も9分以内、10分以上みたいな感じ、そこで切ったわけですね。総合病院には29分以内か30分以上か。これで分析してみたところ、非常におもしろい結果ができました。それは何かということ、それぞれ最寄りの一次医療まで9分以内、総合病院29分以内という両方の条件が満たされたときのみ定住条件はかなり向上しています。そこからずれると、もちろん両方がダメなところはかなりひどいですね。10%ぐらい5年間で減少してしまっている。高齢化度も高い。

ところが、どちらか、広域的な総合病院だけ近かったらいいかということ、最寄りの病院が9分以内になかったところは、実は、もう定住条件は悪化しています。逆もまた真なりで、最寄りの診療所まで9分以内だが、総合病院までは30分以上かかる。これ

も悪化しているのです。

だから、何が言いたいかというと、単に広域的にどかんと拠点を建てれば良いというものではない。バランスなのですね。最寄りのところにも一定の拠点があり、そして、広域的にも30分程度ではそこへ行ける。この条件を満たすような圏域づくりが中山間、あるいはその圏域としての定住条件にも非常に必要であるということが実態面から明らかになっています。

あとはこれをどういうふうに満たしていくか。特に、最寄りの身近な拠点機能をどう守るかなんですね。先ほどのように放っておくと、どんどん、どんどんなくなるわけです。それで今は、こういう複合型の取り組み、いわゆる合わせ技というのを私はお薦めしています。

これは高知県の例ですね。わずか人口300人のところでガソリンスタンドが撤退することになった。これはもう困るわけですね。20キロメートル、30キロメートル先まで、次に行かないといけません。

ガソリンスタンドがなくなるという個別課題に対して、単に個別解決をしてもだめですね。それは、根っこは複合的なものからです。

ここの住民は、自分たちで大宮産業という株式会社に3分の2の住民が出資しました。しかも、その個別解決だけではなくて、やはり売店も一緒に復活させよう。「そこは地域のたまり場であっていいよね。肥料とか無いものは一緒に仕入れ、そこで配達してもらおう。せっかくおいしいお米ができるのだから、みんなで売ろう」。こういうことで立派にビジネスをここで成り立たせています。2人の従業員さんを雇用して、こういった知恵が分野を横断した合わせ技でやっている。大体ガソリンスタンドが6割、売店が1割か2割、ほかで2割ぐらい稼いでビジネスが成り立つような仕

掛けです。

高知県は県としては昨年の4月から画期的ですが、中山間対策では縦割りをやめました。それまではばらばらに福祉は福祉、医療は医療、鳥獣対策は鳥獣対策、集落対策は集落対策でやっていた嫌いがありました。でもここは県職員を60名、この10年間張りつけています。現場の市町村職員と、あるいは現場の人と一緒に汗を流してという、すごいことをやってきました。そういう中から、やはり縦割りではだめだということになりました。地域のほうは全体で、地域ぐるみでいろいろな問題を解決していかなければいけないということで、こういった集落活動センターということで、その地域の実情にあわせて一緒になってやる。そういうボトムアップ型のものを行っています。しかも、そこに高知ふるさと応援隊という人材を張りつける。これは総務省の協力隊支援員を使ってもいいのですけれども、プラス100万円、県が支援しています。こういった形のをやり始めていまして、私もこちらのセンターの推進アドバイザーをしています。だから、こういった形が要るのではなからうか。

そして、昨日、私は喬木村でも講演させていただいたのですが、拠点のつくり方も、今までは補助金も縦割りだったので、全部ばらばら、ばらばら、いろいろ分散的にやってきました。そろそろ、先ほどの一次的な生活圏のエリアではまとめてやっていく必要がある。そうでないと人と人がまず出会えません。あるいは非常にむだが多い。だから、「郷の駅」というものにいろいろな機能を集めて、それで交通の流れも人も物も、これは法令の改正が必要などころもまだありますけれどもやっていく。そして、今後は循環の経済ですから、いろいろな地域のローカルなエネルギーもここで循環させていく。

私はまきストーブで暮らしていますが、まきの駅、木の駅もここにある。電気自動車もここでチャージすればいい。そして、それは災害のときには地域の防災ステーションとして機能する。遠いところからいろいろなそういう建設機械がやってくるのでは間に合わないですね。やはりここであって、農業にも林業にもそういうのを使い回す。こういった仕組みが本当は要るのではないか。

国土強靱化というのがありますが、それ自体は非常に大切なことですが、大きな、どーんとしたネットワークなしではもたないです。やはり各地域にこういった核となるような施設をつくっていくことが私は国土強靱化に欠かせない要素だというふうに思っています。

ちなみに昨年から国土政策局で「集落地域における小さな拠点検討委員会」というのが始まっていて、私も委員です。この「小さな」というのがすばらしいですね。「小さな」というのは、国の省庁でほとんど使えない言葉です。小さいものはだめだというのがこれまでの国のやり方なのですが、初めて、小さな拠点で、合わせ技で集落を支えていくという発想が生まれています。今年から12の地域で、この喬木村も含んで、実際にこういうのをつくるために検討を始めようというものが始まっていきますから、少しずつ風は変わり始めているのかもしれない。

そして、3年前になりますか、イタリアの山村がものすごく元気だぞという噂を聞きまして、私も行ってみました。これは本当に元気でしたね。イタリアは合併していません。コムーネという自治体が全国に大体8,000ある。平均人口7,000人ですが、山間部に行くと500人、1,000人の村がほとんどですね。でも、非常に元気なのです。

なぜ元気なのかというと、徹底的にそこ

の暮らしというのを、地元の中で衣食住をつくり上げている。例えば、既製品の Pasta なんかは食べない。このおばあちゃんが毎日打つ手打ち Pasta を食べています。だからそこにまた小さな経済が生まれますね。チーズも伝統的なものでそこでつくって、さらに、ここは輸出までしているのです。やはり負けたなと思ったのは、窓枠まで地元の職人さんがちゃんどつくっている。あるいは、その金具も鍛冶屋さんがつくっています。ストーブも、それから、ピザも地元のまき。こういうところでやはり定住する必然性が生まれているわけですね。ただ、それは守りではなくて、村から村へ行けば、チーズもワインもパンも建物も全部違うわけですね。だから、私たちも含めて、観光客が押しかけます。それが攻めにもなっているというのがすばらしいと思いますね。

この三遠南信は非常に多様性に富んだ地域だと思います。30以上の自治体があり、388の小学校区がある。それがこういった形でどんどん、その伝統も生かしながら多様性をやるのが本当はすごく可能性を秘めているのではないかなと思います。そこで388の定住のストーリーがあるはずですね。

今までの中山間地域の対策というのは、規模の経済で、特定地域のひとり勝ちですね。こういうのをやってきてしまいました。もう何かだけ。レタスはレタスだけとか。だから、それだけだと、それ自体が成功するのは悪いことではないかもしれませんが、ほかのところがないがしろになる。中山間は、特に中国地方、島根もそうなのですが、なかなか全国市場に向けて1.0になるだけのロットがそろわない。0.2とか0.3ばかりです。これを一つだけひとり勝ちさせて、あとはまあということになると、循環も途絶えれば資源も荒廃します。やはりイメージとしてはこういう形で、先ほどの

大宮産業ではないですが、0.2、0.3、0.2、0.3で1.0をつくるような、こういうことをしないと小規模分散的な資源とか、その営みというのはどんどんなくなってしまいます。あるいは拠点にしてもそうです。ガソリンスタンドでは0.3にしかならない。あとはやめてしまえということになる。それではどんどん消えるばかりで、定住条件を守れません。

そのためには、先ほどの「郷の駅」とか、あるいはそれを組織して支える集落活動センターみたいな、結節機能とここでは呼んでいます。こういったものを各地元レベルにいろいろな形でつくっていく必要がある。あるいは、それを実際に支える人材を配置していくあるいは地元でも雇用していく、こういう仕組みが要るのではないかとはいっています。

今、全体としては循環の経済への移行が急がれていると思います。今までの規模の経済でどんどん使い捨てであれば大都市の優位性が目立ちましたが、時代も2周目に入っています。団地も1周目はよかったです。どーんと新しい家が建ち並び、学校があり。今、2周目になったところで、もう次が見えていません。中山間地域というのは、ある意味、何百周目の地域社会のはずですね。そのことを思い起こし、やはりこの資源を今みたいな合わせ技で小規模分散だけでもきっちり使い切るような、こういう中に次世代の定住を呼び込むような戦略が本当は求められているのではなかろうか。

そういう中に一緒になって加わってもらえるような新しい移住者を呼び込む。そのためにはしっかりした作戦を立てる。冒頭申し上げたように、1年何組なのか。これを余り急いで、ぼこっと来たらだめですね。だって、団地と同じことになります。

(録音切れ)

そういった長期的な戦略をつくるのは非常にづらい作業がありますが、そういったのを各地元でも、そういうものの地元で足りないところは各市町村、そして、こういった三遠南信などの広域でも補完していくような、そういったものが本当はここならできるとは思いませんか。そして、そういった未来の地元をきちんとつくっていく。プロフェッショナルとして、例えば、地方公務員などをもう一回養成し直す。あるいはそういったものをここから、先ほど申し上げたように、輩出するような、こういう人材育成の機能をぜひ三遠南信のみならず、東日本はここで受け持つぐらいのことでやっていただければと思っています。

今、中山間センターも一つしかないのが大変です。私も年間移動距離10万キロメートルみたいな感じで、全国を駆けめぐっています。ここならできると思っています。これだけいろいろな、数百人の自治体から80万人の浜松市までであるという中で、どんどんそこで鍛えて、実際に現場で使えるようにして、全国の中山間に配置していくようなことができれば本当はすばらしいではないかと思っています。

以上で報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。



■意見交換
コーディネーター／
豊橋技術科学大学 大貝教授

どうもありがとうございました。

非常に多くの示唆を含んでいますし、この三遠南信地域のこれからの取り組みに幾つものヒントがあったのではないかなというふうに私自身思います。

ただいまの藤山さんの報告について、ご質問があればお受けしたいと思います、いかがでしょうか。

それでは、今、非常に示唆に富むお話をいただきましたので、そのことを少し頭に置きながら、これから意見交換に移ってまいりますと思います。

時間が限られておりますので、原則お一人当たりの発言は3分程度にさせていただきます。円滑な進行にご協力をよろしくお願いいたします。

それでは、今回のこの分科会のテーマ、人口が減少していく状況の中で、この三遠南信地域の社会、特に中山間地域の持続可能性を考えるというテーマであります。

まずは、先ほど藤山さんのお話にもありました、要は定住というテーマ、あるいは、この地域の活力をどう維持していくか、こういった取り組みはそれぞれの自治体で積極的に取り組まれていると思います。この事例について、まずご紹介をいただきたいというふうに思います。

事前にアンケートをそれぞれの首長さんに対して送らせていただいて、それは回収されております。それに沿って、こちらで少し指名をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

まず、トップバッターとして、浜松市の鈴木市長よりご報告をお願いできればと思います。

よろしく申し上げます。

浜松市 鈴木市長

浜松市は平成17年に12市町村が合併をするという、これまででしたら考えられない

ような合併をして、今の浜松市、政令市になりました。人口が、大体佐賀県と同じくらいです。だから県が一個できたようなものでございまして、当時、旧浜松市が人口62万人、一番小さな旧龍山村が1,500人。62万人から1,500人までの、全く規模も性格も違う12の基礎自治体が一つになったということです。ですから、東大のある先生が「国土縮図型都市」というように言ったのですが、言い得て妙でございまして、日本をギュッと小さくしたような町になったということでございます。

ですから、浜松で都市経営が成功すれば、これは、私は全国でモデルになれると自分なりにそう思っているわけでございます。せっかく一つになったのだから、私は、いかにして都市部と中山間地域の交流を進めるかということを考えています。今まで自治体が違っているとなかなかやりにくかった部分が、一つになったわけですから、都市部の活力をいかに中山間地域に活かすか、逆に、中山間地域の持つ潜在力をいかに都市部に波及をさせるかということでありませう。

そうは言っても、浜松市は今、もう限界集落が127ですから、多分日本一限界集落の多い自治体ではないかというように思いますので、頑張ってやっていかなければいけません。基本は、その都市部と中山間地域の交流、連携をどう促進をするかということでございます。

幾つかポイントがあります。一つは、どこでもつくると思いますが、中山間地域振興計画です。これは総合的なプランでして、236の事業があり、水、生活用水の応援から、地域公共交通の維持、林業の振興、浜松山里いきいき応援隊のような、若い人たちをいかに送り込むかというような、生活支援、地域支援、産業支援まで、総合的に実施しているのがこの振興計画です。

少し独自に始めているのが中山間地域まちづくり事業です。これはNPOからの提案をいただきまして、それを採用して、いろいろな中山間地域振興事業をしてもらおうということで、例えば、採択されたものは「WEB版道の駅による天竜区観光産業活性化事業」。これはウェブ上で道の駅をつくって、観光情報、あるいはいろいろな物産情報といったものを発信する事業です。その他には、「中山間地域自立高齢者支援事業」といったものとか、あるいは遊休農地を活用した「そばの里づくり」とかがあります。NPOの提案によりまして、総額6億円の予算を用意し、大体交付期間は5年間で実施してもらおうというものです。

それから、「中山間地域交流ネットワーク事業」。これこそまさに、いわゆる都市部の例えば自治会と中山間地域の自治会を姉妹自治会にして交流をすとか、学校を姉妹校にして交流をすとか、あるいはいろいろな民間団体の交流を促進すとか、ボランティアを送り込むとか、そうした都市部と中山間地域の交流ネットワークを行うという事業です。

最後は、これもいろいろところで実施していると思いますが、「田舎暮らし推進事務局」でして、これを設置し、総合的に今、田舎暮らしの相談に乗っています。実績では、平成24年度で22件の相談がありました。

こうした取り組みを通じて、できるだけ中山間地域の活性化、定住人口の拡大を図っているというのが浜松市の状況でございます。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございました。

最後の田舎暮らし事業の中で相談が22件あったということですが、その中で具体的

に移住というか、定住に結びついたような例はあるのでしょうか。どうですか。

浜松市 鈴木市長

幾つかあります。最近おもしろいのは、東京のコンサルタント業をしている若い人が来まして、家族で水窪というところに移住しました。今、東京と田舎と両方で事業をやっているのですけれども、「あなたの知り合いの企業をどんどん連れてきてください」とお伝えして、IT企業を水窪に誘致したり、人脈を活かして都市との交流を進めたりしました。意外と浜松の田舎の良さというのは、割とアクセスがいいものですから、例えば、春野からは1時間で浜松駅まで行けます。でもそこは一応過疎指定を受けているのです。普段はものすごく環境がいいところで、生活ができて、必要があれば、東京に2時間から3時間で行けます。でも、そんなに頻繁に東京へ行く必要がないなら、「30分くらいで浜松の都市機能も十分活用できるので、田舎の良さと都市機能の両方活用できる」と、こういう良さを売り込んでいこうと私は言っています。これからそういうことで人を引っ張ってこようと考えています。

申しわけないですけども、先生のところの島根ですと大変かもしれないですけども、浜松から新幹線だと1時間15分で東京まで行ってしまいます。そういう地の利のよさというのを活用して引っ張ってこられるかなというように思っています。その方をオピニオンリーダーみたいな位置づけにしまして、今、地域の活性化もやっています。

泰阜村 松島村長

報告したのは、若者定住住宅をつくっているという話だったのですが、その前に、今日の前段で県境地域との連携という話が

ございましたが、もしかしたら鈴木市長さんのご理解かもしれませんが、私たち、救急患者が発生して長野県のヘリコプターがだめなときに、静岡から来てもらうというのはごく当たり前みたいになっておりまして、そういう点では、いい意味で県境のこの連携というのが非常にうまくいっているなということをご何年間か実感しております。これも三遠南信連携のおかげかなということをつくづく思っております。

平成6年に若者定住促進条例という条例をつくりまして、例えば、Iターン者が住宅を建設したら100万円補助金を出すと一時期は流行りました。国は、個人の財産形成に補助金を出すのはまかりならんと言って、週刊誌で例のいろいろ問題になったのですが、そういうようなことをやってきました。

川を挟んだ隣の下條村というところが、いわゆる行革で財政的に非常に豊かになって、住宅建設して、出生率も高くて人も増えたという話で全国的に有名ですが、私のところも今までやってきたのも、どちらかというと中心市飯田への通勤者のベッドタウン的な要素で、下條村というところもそうだったし、私のところも、今、そんな感じで一部に住宅をつくっております。しかし、平成6年からずっとIターン、Uターンということを取り組んできましたが、結果的に、住宅建設するだけでは人が来るわけではないということを最近感じております。

それで、私のところにJR飯田線の温田という駅があるのですが、その住宅もつくったのですが、私は、温田というところは飯田に遠いので人気があるのかなと思いましたが、そこへIターンされて子どもさん1人を連れてきた方は、温田駅まで歩いて5分、阿南病院まで歩けば七、八分で行けるところに住んでいます。温田駅には高

島君という方が店を出して、高島屋というのですが、名古屋の駅に行っても高島屋だが、泰阜村にも高島屋がある。Iターンしてきた人が、「駅に近くて病院も近い。村長に山の中だとだまされて来たけれども、全然問題ない。駅に近くて病院が近いというのは、こんな理想的なところはない。」と言われて、私は、「あっ、そういうものなのだ。」と気付かされました。

環境整備としては、やはり暮らしていけるのに安心していけるようなことが必要であることと、それから、先ほども言われましたが、19集落に分かれていて、地域との付き合いも大事なので、そういう人間関係が重荷にならない人、道路作業なんか一緒に出てやって非常に楽しかったというようなことを感じられるような人で、そういうようなところがという点で、やはり、単なるベッドタウン的なことよりかは、この泰阜村という、本当に山の中で住むことが、「安心して住めますよ、住むことは魅力的ですよ。」というような発信をしていくことが大事で、そういう人が来たいと言ったときに、すぐ入れるための住宅を、今、また新たに建設しているということです。

大鹿村 柳島村長

大鹿村は人口1,130人ほどで、小渋ダムというダムの奥にある小さな村でございます。人口につきましては、昭和25年に5,000人を超えているという人が住民登録されていたのですが、昭和36年の水害、また、その後のダム建設等により、だんだん人口が減ってきて、現在は1,130人という村です。2割ぐらいに減っているということと、もう一つ、高齢化率が50%という、村全体限界集落と言われればそれまでかと思っております。

現在、Iターンの方が非常に多い村で、200人有余はいるのではないかと思います。

2割から3割近い方がIターンの方ではないか、こういうふうに思っております。この方々は、主には若い方は農業を主体に自給自足を目指してみえられる方、また陶芸のような、いわゆる芸術的なものを目指しておられる方、それに60歳定年後の、リタイアして、あとはのんびり環境のいいところで暮らしたいというような方々がIターンをされてきております。

村が地域を維持していくには、やはり人がいないとだめという観点から、いろいろな事業をやっておりますが、その中で、平成24年度からですが、プチ移住ツアーというツアーを組んで、大鹿に興味があって、将来定住をしてみようというような方に村に訪れてもらいまして、本当にプチで2泊3日ですが、農作業体験とかをしていただいて、大鹿村というものを感じてもらって、そういった取り組みを民間の有志の方たちが始められました。

長野県には元気づくり支援金という、かなり幅の広い補助制度がありまして、それを使ったり、村の一部補助を使ったりしまして、2年間で6回ほど実施されました。1回当たりの参加者は非常に少ないのですが、全体で20数名ほど今までに参加されて、現在までに2世帯、3名が空き家を利用して定住されました。

この定住の内容ですが、今、泰阜村さんは住宅を建設されるというお話だったのですが、大鹿村の場合、人口が2割になってしまったということは空き家がいっぱいあるということで、その空き家をどう活用するかということも課題になっていた。これも平成24年度からですが、空き家を所有している方が希望すれば、賃貸または売却によって、そのうちを活用する場合には村の空き家情報というホームページに載せてもらうことを条件しています。みんなが手をつけるのに一番困っているのは今まで使わ

れてきた家財の片づけですが、特にお年寄りがずっと住まわられていて突然亡くなると生活のそのままが空き家に残っているわけで、それをどうするかというのは、その子どもさんたちではなかなか判断がつかないというところがありまして、「それを片づける場合には、片づけ費用の8割、上限10万円を補助します。そのかわり空き家を売ったり、貸したりしてください。」ということを始めました。

ただ、古い家ですので、改築するについても、その工事費の5割、半分、上限50万円を補助するというルール。もう一つ、空き家となっているものについて、景観上も悪くなりますし防災上もよくないという理由によって、これはあくまで所有者の意思でございますので、解体したいという意思があれば解体費用の8割、これもやはり50万円を補助するということを平成24年度から始めまして、今までに家財の片づけをした人が8軒、改築の補助が5軒、解体補助が5軒。だから、5軒の古い家はもう解体されて更地になったということでございます。

改築補助を受けた5軒については、すべて転入者、また、村内で世帯を分けて入りたいというような人たちが入りました。約10名がその中で生活しております。ただ、年齢とか職業などは全く統一性はありません。その10名のうち6名は、この2年間の間のIターンの方ということで、6名のうち3名は、先ほどのプチ移住ツアーの方という、そういう連携で、現在いろいろな人が大鹿村に興味を持ち、また、住んでみようという方向で、一応村のホームページから流れた制度に乗かって、ある程度の方が住んでくれるようになってきたということでございます。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございます。

もっといろいろな取り組みのご報告をいただきたいのですが、時間が限られておりますので、今、三つの市、村のご報告をいただきたいのですが、恐らくそれ以外の市町村でも様々に定住に向けた取り組みはそれぞれ独自に取り組まれていることと思います。

私自身の話になりますけれども、数年前に豊橋市と浜松市の都市部の若い、20代から40代の人にアンケートをして、「中山間地域に住みたいですか」、「もし何らかの条件が整ったら住みますか」という質問をしたら、「可能なら住みたい」という人が大体2割以上いました。だから、そういう中山間地域に定住を目指そうとする潜在的な人は相当数いるということだろうと思います。

そういった意味でも多分、山の魅力をもっと発信していくべきだろうし、受け入れる側はその環境整備をしっかりとやっていくということが必要なのかなと思います。でも、まさに今、それがそれぞれの市町村で着実に取り組みが進められていると感じます。その成果が少しずつあらわれてきているような気がしてなりません。

時間がないのですが、藤山さん、今の三つの事例について、何か簡単に感想がありましたら。

先に松島村長からご意見があるようです。

泰阜村 松島村長

泰阜村の場合は、その住宅はI・Uターン用が50%。もう50%は、地理的条件から結婚すると親元を離れて飯田に行くというケースがほとんどです。だから、それを村の中へ、世帯分離を止めようという意味の住宅もやはりあるということですね。空き

家は、うちは住んでくれるなら200万円ぐらい改修費用を出すけれども、大鹿のようにいかない。大鹿は美しい村で、うちは美しくないから、空き家はうまくいっていませんね。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

私、先ほど言い忘れました。私も島根県の中山間地域は何回か訪れさせていただいてヒアリングなどさせてもらったのですが、やはり島根県とこの三遠南信地域の一番大きな違いは、豊橋、浜松という都市部がすぐ近くにあるということ。アクセスという意味では本当にいいです。だから、先ほど東京からも来やすいしという話。さらに言えば、この飯田には14年後にはリニア駅もできますし、三遠南信道も全線が開通すれば、極めてそのアクセスという面では生活をする上で利便性は高まります。そこはこの三遠南信地域の一番大きな強みだろうというふうに思いますので、そういうことと、それぞれの地域ごとでの地道な取り組みをうまく結びつけていくということが重要なかなというふうに思いました。

時間が予定より過ぎていますが、藤山さん、何か感想があれば。

島根県中山間地域研究センター

研究統括監 藤山浩 氏

今、やはり3・11以降、東日本大震災以降、ちょっと変わってきたなと思います。そういう若い人が本当にまじめに、これからどこで子どもを育てようかというのが入ってくる事例は、多分こちらでもありますし、島根も非常にふえていますね。そこへ応えることが非常に必要なのではないかなと思う。特に女性というか、今までは男のほうがロマンを求めてくるような部分もあったのですが、今はお母さんが本当に子ど

もをこういうところで育てたいということで、今、島根県でも兼業型就農コースというのをつくってしまして、その中で当たっているのが半農半看護です。看護師さんをやりながらプチ農業をやるような。だから、いろいろなそういう真面目にやっている人を受け入れるというのがすごく重要になっているのではないかなというのは、お話を聞いても思いました。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

(テープ交換 録音切れあり)

・・・また、時間的制約が解消されつつあるということで、今、ご紹介いただいた取り組みというのが、恐らく新しい段階を迎えつつあると思います。今、藤山さんが言われましたように、若者の意識も3・11以降、少し変わりつつあるといったふうな、非常に中山間地域にとっては未来のある話が幾つも出てきたかなというように思います。

それで、続きまして、こういった取り組みを定住の促進、あるいは地域活力の維持に結びつけていくというそのために、もともとの中山間地域、特にこの三遠南信地域には多くの魅力あるいは資源というものがあります。もうこれは皆様もそれぞれがしっかりと認識をされているところかと思いますが、その点について、もう一度ここで確認できればというように思います。

魅力という場合に、それは内から見た魅力というものと、あるいは外部から見た魅力というものがあるかと思います。それぞれの視点からご意見をお聞かせいただきたいと思います。

まず、この点につきまして、設楽町の横山町長からご発言をお願いいたします。

設楽町 横山町長

私の町は、ご承知のように、愛知県の西北部に位置しているところでありまして、西は豊田市、そして南は新城市、東は東栄町、また、北は豊根村、根羽村というところに隣接している町であるわけですが、こうした町の中で65歳以上の高齢化率という、やはり43%というようなことで、若者が極めて少ない。そんな状況でありまして、限界集落、中には地域コミュニティの形成が崩壊しているというような地域もあります。そして、これを今後立て直す方法は何かというふうに問われて、すぐに解決に結びつく方法があるわけではないというのが正直なところでありますが、これは私の町だけではないと思っております。

さらに私の町は国によって大ダムの建設交渉が過去40年にわたってありまして、これも現在、まだ進められているという状況にあって、これによって集落全体は全戸が移住をしていくというようなことで、集落がなくなっていく、そのような状況がある中で人口減少に拍車がかかっていると、こんな状況です。

こうした中であって、私の町で住み続けていく住民の方々というのは、やはり将来の町の向上に期待をされているということがあります。これは当然なことでありまして、私はこれからの地域コミュニティの存続をしていく一つの方法として、また、町の将来を見据えて、ここで生活をして、今以上によりよい形、こうしたことをつくり上げる手段としては、住みよい環境を売りにしていく町、そうしたものを強調していきたいと思っております。

特に、子育てというのは、自然環境に恵まれている中で、しかも人間性が豊か、そして、今まで私の町は教育施設、学校等を重点的に整備してきておりますので、こうした環境を強調する、子どもが育てやすい

町なのだということを広くPRしていきたい。中に、家であるじの方、若いお父さんが仕事を求める、そうしたときに、うちの町だけで職を見つけようと思うと、今の若い人たちというのは都会志向というか、どうしてもそちらのほうに目が向いていくというような状況があります。私の町は新城市へ30分、三遠南信の自動車道、今度、鳳来峡インターまでということになると40分から45分ぐらいかかる。そういうような状況の中であるわけですけれども、やはり若い人たちに魅力を感じてもらえるというのは、こうした道路整備、ライフラインの整備。特に私の町は、今言ったように、高速道路や高規格道路まで移動するのにまだまだ時間がかかるという、そういうイメージがある町でありますので、ここを何とか積極的にこうした道路整備を重点に置いていきたいと、このように考えております。

そうした中で、今申し上げたように、地域の活力を維持していくためには、どうしてもこの若者の力が必要不可欠です。若者に定住していただくためには、今言ったように、雇用の確保、それとともに生活の利便性、今、申し上げたような環境を整備していく、こうしたものを前面に出していく必要があると思っております。

そして、外部から見た中では、この豊かな自然が本町の唯一の観光資源ということをしてPRしながら、特に森林が本当に活気づかないというような中で、これを何とか生かそうということで木質のバイオマス、これを使った発電、これに取り組もうということで考えております。

この発電というのは、単に私の町で所有している山林だけがターゲットではとても資源の量としては追いつかないということで、近隣の町村、新城市以北、我々北設楽郡、そして、さらには浜松エリア、天竜川流域、そして、この南信州、こうしたエリ

アまでを含めた材の獲得というか、確保をしなければ安定した材の供給ができない。そのようなことを思い浮かべながら、エリアとしてはそういうところまで広げる、そうしたところでも発電というものを注視して、これからこれに取り組んでいきたいと、こういうふうに思っております。

こうしたこれからの時代、人が生活する上で何か重要か、今もいろいろお話をさせていただきましたが、人が暮らしていく中で価値観がどういったところでの視点で評価がされるかという、こうしたことが考えて直される時代が来ると思っております。決して田舎が住めない所ではないというように、人の感覚が変わってくる時が来るのだらうと思っております。

そのためには、こうした住む環境に不足のない状況をつくり上げる。こうしたものを整備し、また、広く情報発信もしていくことが必要だろうということで、こうした地域があるということの存在を強調していくことがこれからも必要になっていくと思います。

根羽村 大久保村長

私どもはちょうど愛知県の豊田市との境に位置した村でありまして、川が矢作川という川で、愛知県で一番高い山の茶臼山を源流に、117キロメートルのコンパクトな川が流れているところです。

そんな中で、古くから矢作川というのは人の生命を育んできたという歴史を持っておりまして、特に安城ヶ原、安城台地にある明治用土地改良区が100年前に明治用水を開削したときに、この水は山から来て、山がだめになると水がないというような形で、100年前に水源林を根羽村に確保したというような歴史を持った形のところでして、その後、昭和時代に入っては、今度は公害があって、その公害闘争が上下流で起

きて、さらにそれが今度は上下流の連携のあった「流域は一つ、運命共同体」というような形で取り組んでいる地域です。

そんな中で、矢作川といいますと、今、川の上流では何が起きているかということは、もう全国共通ですけれども、そこでは大変なことが起きているよということは、上流に人が住まなくなってしまうたら、山が荒れて、川が荒れて、それで、中流の皆さんが住んでいる川が荒れて、それで、特に海まで行って海が荒れてというような形で、国土が全部壊れてしまうよという減少が今起きているということ、私どもも現実でありますし、そういった状況も下流の皆さんにいろいろな形でお話といたしますか、情報を共有させていただきま

そんな中で、私どもの村では、何とか地域に住み続けられる仕組みをつくりたいなということをやっておりますし、先ほどの講演の中でもいろいろ出てきておりますけれども、まず、地域に住み続けるためには、そこで働く場所、雇用の場所があること、そして、地域の中で小さくてもいいので経済、お金の循環があること、もう一つが、いろいろなサービスの循環がその地域でできる、その三つの仕組みを小さいなりにつくっておけば人は住めると思っております。それが、何人規模が適正というのはそれぞれの地域の考えることだと思いますが、私はそんな感じを持っておりまして、そのためには、やはり生きる術としては、昔といいますか、今までみたいに、大企業に勤めてたくさんの高収入を得るというのは、もう田舎では絶対無理なので、林業、山で勤めながら、例えば農業、少しお百姓をしながら、そして、すばらしい環境の中でインストラクターとか、何かそういったような、少し商売をしながらという、そのハイブリッド的な生き方というものもあると思うので、そういう田舎ならではのハイブリッド的な

生き方の仕組みというのも一つの方策だということで今考えております。それ以外に通常の仕事もあります。

それで、さらに、私どもは92%が山でして、その木を何としても生かさなければいけないという形ですので、今、林業、丸太に付加価値をつけて住宅用材として販売するまでのトータル林業という仕組みを進めております。さらに、今度は地域材というよりも、それをいかに使ってもらうか、いかに使うかという仕組みをつくらないことには意味がないので、今、矢作川の下流に向けて、流域の皆さんと地域材の枠を越えた矢作川の流域材とか、天竜川なら、またこちらの何とか流域材でもいいし、南信州流域材でもいいと思うし、三遠南信何とか流域材でもいいと思いますが、そういった仕組みをつくって、使ってもらえるところに資源を使ってもらおうという取り組みも始めていますので、そんなところに一つのきっかけを求めています。

今、間伐をしても山の中に木を放置したりとか、木を出してきても枝とか頭は捨ててきたりしてしまうのですが、それを何とかエネルギーに活用したいということで、根羽では森林組合の乾燥機に工場が出るおがくずとかバーク、皮を使ってその熱源としたり、さらに、今度、根羽村でも高齢化率が非常に高いということで、村だけではとてもそういった高齢者の福祉施設、いわゆる特養はできなかったわけですが、民間のお力をかりて、公設民営で小さなそういった福祉施設をつくりまして、その熱源にも木をエネルギーとして燃やそうという仕組みを今つくっております。

さらに、まきを燃やすか、チップを燃やすか、ペレットを燃やすか、さんざん議論したのですけれども、やはり根羽では、今、まきを燃やそうということになりました。ただ、まきを燃やすときには、どうしても

まきをくべる人が必要ですが、では、灯油やガソリンスタンドと同じように、まきをくべる会社というか、まきをくべるところまでつくってしまえば、そこで一つの働く場所ができますので、それまでを入れて1立米幾ら、1回のお金が幾らという、そういう仕組みもつくろうかということに今、取りかかったところであります。

あと、もう一点は、やはり未来を担う子どもたち、次世代を担う子どもたち、地元の子どもたちにいろいろな体験、「ああ、根羽に住んでよかったね」ということをしっかり体験してもらいたいという取り組みをしているのとあわせて、矢作川の流域の、今、安城市さんと私どもは深い関係といたしますか、いろいろなお世話になっておりますので、お父さんは安城市で仕事をしていただけて結構ですので、根羽のすばらしい環境で、できればお母さんと子どもさんが、そんなにたくさん要りません、私ども1学年で多分1人か2人、ここへ来ていただければ、学校はちょうどコンパクトな学校で回っていきますので、ぜひそんな形で、「お母さんと子どもさん、1年で結構ですので根羽へ来てみませんか。」というのを今までは口では言っていたのですけれども、今回から正式に、もっと公に言おうということですので、公にして、そういったことを皆さんにお話ししようかなと思っております。

そのような形で、やはり流域というのはお互いに助け合いながら生きていかなければいけないと思いますが、ただ一番は、その地域がやはり持続可能であるというか、生き続ける仕組みをつくっておいて何か情報を発信していかないと、困った、困ったという発信では難しいので、私ども、本当は困っているのだけれども、ぜひそのような、今の村づくりを理解してもらって、そこに応援してもらえる人に応援してもらって、

そんな仕組みづくりをやっているところでもあります。



コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございます。

済みません。私が指名する順番を間違えてしまいました。本来なら大久保村長さんにはその後のところでご発言いただくはずであったのですがけれども、済みません。今、仕組みづくりというお話をいただきました。

話をもとに戻しまして、この地域の魅力とか資源という視点から、阿智村の岡庭村長からお願いします。

阿智村 岡庭村長

阿智村も生まれる子どもが50人から60人、お亡くなりになる方が80から100人ですから、放っておけば本当に人口がどんどん減っていくわけですから、どうしてもやはりどこかから定住人口を入れてくる、その皆さんたちに集落や何かも維持していただくということが大事になってくるわけයි。

それで、考え方としては、ただこちらへ来ていただくのではなしに、村の持っているさまざまな資源を活用する、そういう中で、起業をしていただく、仕事をしていただくということが大事ではないかと思っています。例えば、今、私どもでところでは人・農地プランという農林水産省の後継者対策を活用して、村の中には荒廃地がたく

さんあるわけですが、その荒廃地を使って農業をおやりになる方を募集しました。1人の方は、一流のジャズマンでして、農業をやりながらジャズの演奏をやるというかたち。そして、村の中でも一流のジャズマンの皆さんが集まって、山の中でジャズコンサートが開かれるというようなことも行われています。それで、一流の画家の方も来て、農業をやりながら絵をかくというようなこともあります。そういう点で、仕事をやっていただける仕組みを村の中へつくっていくということだと思っています。

例えば、東京にご夫妻がいらっしゃいまして、今、阿智村へ来ているのですが、阿智村の中であいていた調理室を使って、非常においしいパンをつくる。今度は何かフランスでパンの修行をした方が店を開くというので、これはどうするのかなと思っています。私も買い切れないなということでございますけれども。

そういうようなことで、例えば、農業だったら、今年から私どもは農学校を始めました。新しく農業をやる方に2年間、村の産業振興公社が農業を指導する形です。村で600万円のハウスをつくりまして、そのハウスを2年間経営していただいて、自立するときには村も応援して自立していただくという、そういう仕組みをつくるという一つに、やはり通信環境が挙げられます。私どもの村では光ファイバーを全戸に引きまして、今、フレッツ光で全戸を、要するに都会と全く同じ通信環境を持っているわけයි。リニアも入ってくるということですし、三遠南信自動車道も入ってくるということになれば、この光ファイバーの通信環境を利用して、やはりクリエイティブな仕事をやる皆さんにも来てもらえる。それから、阿智村というところは、今、200人ぐらいのカメラを持って集まってくる皆さんもいらっしゃる。風光に感動して

帰っていただけるこんな村で、光通信がしっかりサービスできているわけで、ここで仕事をやれる。そういった可能性をやはり生かしていきたいと、こう思っているところです。

東栄町商工会 井筒会長

それでは、時間が余りないようですので、私も端折ったような話になろうかと思いません。

まず、私どもの町・東栄町はどんなところに位置しているかということですが、南は新城市、豊橋市方面です。国道151号沿いを豊橋市のほうに向かって、それから、東に向いては浜松市、西に向いては、先ほどお話がありました設楽町、北に向かっては豊根村を挟んで、この長野県という、そういった位置です。ここで私どもは今、大きな変化をしている町の一つかなというふうに思います。国道が151号と473号という2本、町の中で交わる。そして、飯田線に駅がある。東栄病院という総合病院がごぞいます。そういう非常にいろいろなことに対して恵まれた地域かなと思います。三遠南信自動車道のインターも今、着々と工事が進んでいるということで、東栄インターができるわけでごぞいます。そういう位置です。

そこで、商工会、要するに経済のほうで、この地域で経済的にどういうふうにしたらいいかということで考えたところ、あるものを有効に使うということが原則ではないかということで、それでは東栄町に何があるのだといったときには、自然の魅力、これはあると思います。それから、高齢化した人口がやはり40何%であるということ。もう一つあるのは、あいた畑や田んぼ、そういうかつて農業で生計を立てていたようなものが、今、草に覆われているということ。そういうような状況になっています。

そういうものを、何とか活用することで魅力のある地域がつかれないかということで、まず、大きな技術が必要なものではなく、いろいろなものはなくても、年寄りが容易に、少しやる気があればできるということで、山菜に着目しました。そして、当然、地域には山菜は自然に山にあるものもたくさんあります。それ観光資源に使えるような、平地、要するに、あいた田んぼや畑に年寄りの力で作って、それを観光材料にしようということで事業に取り組みました。おかげをもちまして順調に進んで、この間も第1回目のモニターツアーを行ったところ、浜松市から20人ほどの方に応募をいただき、いろいろな意味で体験した感想等を聞かせていただきました。今、いろいろなデータを整理している最中です。

その中で、私どもが感じたのは、やはり住んでいる私どもとは違った視点で、魅力があるということで、アンケートの中で、「今日のツアーに対して、どのぐらいの満足度があるか」ということを答えていただいたのですが、大体ほぼ100%に近い、90%以上の方から「来てよかった」という回答をいただいたということで、私どもも自分たちの今やっていることが方向性として間違っていないと感じたわけでごぞいます。

時間がないので細かいことまでしゃべれませんが、そのような形で今進めているということでもあります。

そして、一つ、最後に提案ということでお話しさせていただきたいと思います。

今、道路についてはほとんど国を挙げて整備をされていますが、先ほどの話のように、あるものをどう生かすかということもやはり忘れてはいけけないではないかということで、飯田線を何とか魅力のある鉄道にできないだろうかと思います。これから様々なところで発言ができる機会があった

らしていこうと思っています。具体的にはどうということかといったら、飯田線というのは無人駅だとかそういうのがいっぱいあるところで、乗降客も1日にあるのかなのかということもあるかと思うのですが、その駅のあるところには、たとえ小さくても何らかの集落があるということ。その人たちがそこで生きがいを感じてもらったり喜んでもらったりすることを、この飯田線を使い、お金をかけずに出来ないかということ考える。そういう地域でとれた農産物であるとか、また、ずっと食文化の中であるもの、そういうものを、特にお年寄りの時間とお金のある方に、飯田線に乗って、この三遠南信を旅してもらおうというようなことがうまく発想できないかと思う。そんなことを考えて、今日は発言させていただきました。

三遠南信アミ 水島理事

皆様、中山間地域にお住まいの方々という中で、私は浜松市内に住んでいますので、そこから見ると第三者的、外からという形になるかもしれませんが、三遠南信エリアが大好きで動いていまして、その視点から発言させていただきたいと思っております。

三遠南信地域というのは、今、中山間地域で住むということが問題になってお話しになっていると思うのですが、そうすると、過疎である、人口が減る、不便である、何かそういう話題にどんどんなっていくのですが、私は三遠南信の中山間地に行くと、もうこんな宝の地域はないと、はっきり言って、よだれが出てしまうぐらいに私は憧れています。私は民俗芸能とかが好きで、伝統芸能が好きで、そういうものも拝見しによく伺うのですが、日本自体のDNAというか、震災があってから海外で日本人の姿勢みたいなものがすごく注目されたけれども、そういうものが培われたのというの

は、やはり、日本は昔、こんなに交通網が発達する前というのは山の文化です。山の尾根伝いに人々が行き来して、そしてでき上がった文化だと思います。ですので、もう本当にこんなに豊かな経済……

…… (テープ反転)

…… そういうものが民俗芸能にもつながって、そこで食文化とか、住環境ももちろんですが、そういうものが全部一体になってバランスがとれているというのが、私は中山間地域の暮らしだと思っています。ですので、中山間地域がどんどん人が減ってしまうから何とかしなきゃ、助けてあげなきゃという、その都市からの目線、視点というのは、私はずっとおかしい、おかしいと思っていました。

それよりも町中で、もう全部が整い過ぎたぐらいにライフラインが整った都会の人からすると、自ら生きる力というのでしょうか、そういうのを持った中山間地域の人々はもうすごく格好いいですね。自然が読めて、それで、そこで何もかも自分たちでつくることもできて、下手すれば自分で衣を縫ってしまう人もいますし、綿からつくり出すという方もいますし、食は自分でつくれますし、住は自分で建物も建てますわと、何でもできるんですね。高齢者の方々、そういう知恵も持っているし、技術も持っているし、そこに息づく精神性みたいなもの、そこにすごく感激します。

三遠南信エリアを回らせていただいたときに、この間は阿智村のトンキラ農園さんにも伺いましたけれども、あちらはもう村づくりとか、その先駆けで起こった場所です。あちらの前の事務局長さんからもお話を聞きました。「人間というのは欲を出せばもっともっとと。まだまだもっともっと欲しくなる。でも、この分でもありがたい、そう思えるということって大事じゃないかな。」と、この間も話していらしたの

ですけれども、そういう足るを知るという、そこの足る満足感、幸せ度みたいなもの、そこで満足だと言える、何かその幸せ感って、なかなかないぞと思う。人よりももっともつという、その欲ではなくて、本当に今あることの幸せ感みたいなものが温かいなと思いました。

泰阜村さんのグリーンウッドさんにも伺いましたが、グリーンウッドさんは、それこそ志を持って来ていらっしゃるよな。「生活する上ではお給料も大変だ。大変だけれども、でも、自分はここでこういう暮らしがしたい、みんなに体験してもらうことで喜びを感じている。そこに幸せを感じている。」というように、もう生き生きと話していらっしゃるって、私は感激しました。

それに根羽村さんにも伺いました。根羽村さんで先日お世話になりました森林組合の方々にもお話を伺いました。いろいろと運営が大変で、合併、合併で皆さんがくっつく中、根羽村さんでは独自でいっていると。根羽杉というオリジナルブランドを立ち上げて、それをずっと一貫して、家を建ててというところまですべてトータルにやると。そこも格好いいとか思いましたし、先ほど「三遠南信ブランドにしてもいいね。」なんておっしゃってくださいましたけれども、まさに浜松は天竜杉もそうですし、そういったもの、三遠南信各地のエリアって宝物がいっぱいですね。

先日、田峯小学校さんにも伺いました。田峯小学校は、それこそ10人以下になってしまうと小学校がつぶれてしまう、なくなってしまうからということで、地域の人たちが分譲地を自分たちで造成して作り上げられました。そこで学校も維持していらっしゃるよな。そこもそうですし、四谷の千枚田さん、こちらも来ていらっしゃるよな。すけれども、すばらしい、昔からずっと培って、先人がつくってきた棚田を復活させ

て、それで全く人が来なかったようなところに、今は年間2万人ぐらい見えるという地域になっています。

そういうように、その地域ごとの力強さというのは、「人が減っています」、「悲しいです」という、その話ではないと私は思います。このパワーみたいなものは、民俗芸能もそうですし、この三遠南信エリアはかなり密度が濃いです。だから、世界に絶対発信できる文化遺産としては最適な場所だと私は思っています。私はなんて力を入れてしまいましたけれども、そういうお仲間がどんどんふえているので、これを生かしていきたいなと思っております。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございます。

仲間が増えるということが一番大事なかなというように思います。

それでは、今、地域の資源という視点でご発言をそれぞれいただいたのですが、もう時間があと15分少々になってまいりました。まだご発言いただけていない方に、今、発言のありました、そういった資源を生かして、この中山間地域の活力を向上させたり、あるいはこの生活環境を向上させたりしていく、そのためには何が必要なのかということについて、ご意見をいただけたらと思います。

先ほど根羽村の村長さんからはもう既に仕組みというご発言がありましたけれども、その辺のことについて、まず、高森町長の熊谷さんのほうから、よろしく願います。

高森町 熊谷町長

時間が無いようですので、いま高森町が抱える悩みについて、お話しします。

高森町は人口約1万3,500人の町です。

飯田市からは10分から15分。そして、飯田市に今度できるリニア中央新幹線にも、大体5分から20分もあれば中間駅へ行けるといような、この地域の中では比較的恵まれた環境にあります。

人口に関しては、高森町の2010年と2040年の人口推計を比較すると1,100人ぐらい減少する見込みで、減少の程度は地域の中でも比較的ゆるやかです。平成17年と平成22年の国勢調査では、おかげさまで240人ほど人口が増えています。小学校も2つありますが、それぞれ、あと2人か3人増えると、一つの小学校は1クラスが2クラスになり、もう一つの小学校は4クラスが5クラスになります。また、今年の3月には、32億円をかけて新しい中学校が完成しました。

そういう町ですけれども、これまでは自治組織に対し、行政の仕事をかなり下請けのような形でお願いしてきました。それが住民参加だというような形でやってきたのですが、最近結構大変になってきました。自治組織へ入っている方と未加入者の双方がいらっしゃる中で、入っている人たちから「自治組織に居てもメリットが無い」という不満が大きくなってきているのです。自分たちはお金を払って色々な作業もする・・・つまりグラウンドで汗をかいているのに、自治組織の未加入者は、スタンドの方から腕を組んで見ているだけではないか！ということです。また、自治組織へ入っていらっしゃる方の中には、自分たちばかり大変な思いをしているのは不公平だとして、脱退してしまうという現象も出ています。

自治組織へ強制的に入れるということは当然ながら難しいです。一方で、自治組織に入っている方も入っていない方も、まちづくりへの思い或いは町の課題などを如何に共有してもらおうのかが大きな課題です。

ぜひ、そういった点についても皆さんのお知恵をお借りできれば、ありがたいと思います。

売木村 清水村長

私たちの村は、長野県で2番目に人口の少ない村です。1番目でなくて2番目というのが、やはり謙虚なところではないかと私は思っております。そんな村です。

時間がないようでありますので、大分端折らせていただいて、一つだけ、今、取り組んでいることについて話をさせていただきます。

今年の1月ですが、東京で行われた地域おこし協力隊の募集活動に私も参加しました。その場所に若い人たちが大勢見えまして、その人たちと話をしますと、田舎で何をしたいか目的がはっきりしており、やる気を感じました。そんな皆さんの外からの知識、知恵を生かして村づくりをしたいと思ひ、地域おこし協力隊制度を積極的に活用しております。

そんな中に一人のマラソンランナーがおります。今、NHKのドキュメンタリーで取り上げていただいて、昨夜から放送しております。毎週火曜日、6週にわたって放送しますので、10時55分という夜遅い時間ではありますが、ぜひ見ていただければ幸いです。

彼は昨年、実業団のチームをやめ、売木村で一人で次の大会を目指して合宿をしており、私と出会いました。私は以前より、この売木村の夏の涼しい気候と、その標高の高いのを利用して長距離ランナーの合宿地にしたいと思っ取り組んでいました。そんな中で彼と出会えたのは私にとって本当に大きな出会いでした。彼に出会えたことで合宿誘致は大きく進展しました。一緒に走っていた同僚の皆さん、また、監督の皆さんと、その人脈は非常に幅広くて、こ

の夏、300人を超すランナーに売木村で合宿をしていただきました。彼はフルマラソンから、今は100キロメートルのウルトラマラソンというのに転向して、またその実力を開花しまして、今年も大きな大会で準優勝、先日は優勝と、成績を上げ、世界ランクも4位となってきました。

私も積極的に合宿に来た皆さん、そして、彼の元同僚の皆さん、監督の皆さん、実業団を回りまして売木村での合宿をお願いします。そういう交流の中から、本当に出会いが生まれ、随分私も助かっております。お見えになった皆様は、「こんな近くにこんな良い場所があるなんて知らなかった。」とよく言われます。名古屋からも約2時間足らず、そしてまた豊橋からも、また、浜松からも2時間足らずで来られるという、その地の利というのを今、生かしながら、私は、自然環境そのものが資源であり、似た場所はあるけれども同じ場所はないということで村づくりを進めているところがあります。

NPO法人てほへ 大脇副理事長

いつもは、本業は和太鼓集団志多らというのが東栄町にあります。舞台にずっと20年以上立ってきまして、今、プロデューサーをしています。そういう芸能集団、私たち今、18名いますが、全員Iターンで、25年前から東栄町に暮らしております。地域おこし協力隊とか、そういう制度が動き出す前に、私たちは地域活性をしようと思って奥三河に移住したわけではなくて、芸術家目線で、たまたま出会った縁もあって、この土地が自分たちにとって一番活動していくのにふさわしい土地だと思って住みつきました。廃校の学校を今使っていますが、当時は4名の最後の卒業生がいた学校に3名のメンバーが住みついて、今はメンバー18名。子どもたちを含めると10名以上、

27世帯の村の中に、うちの代表とかも含めて、地元の人と結婚したり、子どもができたというので、ちょっと特殊な状況でいます。

私たちの和太鼓集団のグループが発足して20年たちますが、自分たちがここまで本当に食べるものがなくて、花壇に花ではなくて野菜を植えようという、そこから始まりました。ですので、今はもう実際に経済的なことは恥ずかしくて言えない。ただ、でもプロフェッショナルとして活動してきて、今はもう世界を活動の場所にして、海外ツアーをし、全国ツアーをし、活動しています。

なぜそういう活動が奥三河の中山間地で行えるかという、一つは、私たちは自然や暮らしの中からのいろいろな感情というか、そういうものを感じて創造して曲づくりをします。多分芸術家の人はそのようなところを求めている、そういう場所のほうが感性が鋭くなる、それから、創造性も生まれる。都会にはできない。田舎にいてもインターネットはつながります。ですので、世界と会議もいつでもできます。情報も流せます。そういう利便性もあるということが、ちょっと昔だったらなかなか難しいところが、今はそういうこともあって、私たちは25年前に拠点を奥三河に、たまたまの御縁もあって移しました。

家族もできて、私も高校生と小学生の2人の息子がいますが、妻は同じ志多らのメンバーなんですけれども、そこで子育てをする中で、私たち、全国いろいろなところの学校の演奏にも行きます。いろいろなそういう状況、子どもたちの様子を見ると、ここの地で子育てできて一番幸せだと思っています。これは実際に、町場で本当に子どもの現状やいろいろなものを体感すると、本当に子どもらしくないと思ってしまうことがやはりあります。それが田舎の子ども

たちは、いい表現として言いますが、山猿のように元気に、エネルギーに満ちている。そういう子どもたちを育てるには、やはり町では育てられない。

もう一つ大事なものは、田舎であれば、自然環境が豊かなところであれば育つのかというと、そうでもない。それにプラス、そこで暮らす人たちとの人づき合いが本当に大変だと思うのですが、人づき合いをする。いいことも悪いこともお互いに認め合って暮らしていく。メリットもデメリットも共有しながら、何か新しいものややっていくとか、そういうようなことをする人づき合い、人と人のつながりがあってこそ、そういう子どもたちが育っていくのかなと思っています。

奥三河に花祭という700年以上続く伝統芸能がありますが、私たちの集落にも花祭があって、拠点を移したころから地域住民として花祭にもかかわって、今は子どもたちも含めて、みんなで祭りを支えています。祭りにかかわってきた中で、祭りという一つのそういう文化とか祭りというキーワードが、そこで生きる人の知恵とかつながりとか、そういうものの大切さとか、何か人が生きる上でのパワーみたいなものを未来へつなげていく大事な要素。その祭りをやるという、神事的な儀式を形だけやるということも大事かもしれませんが、その形の裏にはやはり思いがあって、そういうものを700年積み重ねてきた。ということは、今、花祭は700年から750年と言われていますが、1年に1回なので750回から700回ですね。そのお祭りをやることで、そこで生きる知恵とかパワーを代々つないでいくということがあるのかなというように思っています。そういう子どもたちを育てていくことが、また、自分たちのふるさとに愛着を持って、自分のふるさとへ帰って暮らそうとか、自分のふるさとが困っていれば何

か力になろうという子どもたちを育てられるのかなと思います。

中山間の問題として、高校が町に行かないとか、大学は絶対外へ行くということがある。大体の子どもは絶対一回外へ離れます。その子が、「戻ってくるのだ。」と思うような、やはり地域の特性を生かした教育なり、いろいろな施策をしていくということも一つ大事なかなと思います。それから、私たちみたいにIターン者。私たちのメンバーは、岡山、札幌とか、アメリカ人もいます。そういうところから魅力を感じてくるということは、これは志多らという太鼓集団に魅力があって、その仕事に生きがいがあって、多分経済を超える思いみたいなものがあるから来るんだと思うんです。ですので、その土地に不便さを超える思いとか、何かそういう愛着みたいなものがあれば、そういうものを感じる若い人たちはいっぱいいると思うので、私たちNPOとしてもですし、和太鼓集団としても、どんどん自分たちの活動を発表しながら、志多らというのは志を持った者がいっぱいいるという意味で名づけた名前ですのでそういう名前に沿った、第2の、第3の形をNPOとしてもやっていきたいと思って、そういう活動をしております。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございました。

予定の5時半にほぼなってしまいました。本来なら少し意見交換ができればと思ったのですが、私の要領が悪かったのか、皆様の熱い思いでついつい時間が長くなってしまったのか、どちらかだと思います。時間になりましたが、この後の報告会が6時からございます。それに向けまして、今日ご発言いただいた皆様のご意見を、まとめるといのはもうちょっと無理かと思

ます。なかなかこれを一つにまとめることは難しいのですが、一つとしては、やはり定住促進という観点から言いますと、とにかくこの地域にはすばらしい魅力が存在していることは間違いない。それはもう皆さんが認識されていることだと思います。それを生かした働く場、雇用の場というものをどうつくっていくか。そのことが定住にも多分結びついていくのだろうということだと思います。そのための人やものの交流、あるいは連携の仕組みづくりといいですか、人とかものをつなぐその仕組みづくりが恐らくこれからのこの三遠南信地域全体としての取り組みとして必要になってくるのではないかなと思いました。

2点目は、何人かの方にご発言いただきましたが、そういう定住促進に向けて、やはりこの地域の魅力なり、あるいは取り組みを外に向けて情報発信していくということが非常に重要だろうということ。とにかく魅力はいっぱいあるのだが、宝の山というご発言がありましたけれども、それをどう情報発信していくか。ここがやはり大きなポイントかなという、基本的にはこの2点にまとめさせていただきたいと思うのですが、よろしいでしょうか。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございます。

それでは、最後になりましたけれども、今日蟹江先生にせっかくご参加いただいていますので、感想を一言お願いできればと思います。よろしくお願ひします。

足利工業大学 蟹江副学長

お話を伺っていて、この三遠南信の各市町村の熱い思いがひしひしと伝わってまいりました。本当に頭が下がります。テレビで報道された泰阜村さんとか下條村さんと

かはよく存じ上げておりましたけれども、非常に魅力がある地域だと思いました。

私、実は博士論文の研究で、地方都市圏にどうやったら人が定住するだろうかということが無謀にもやりました。皆さんご存じだと思いますが、現在の日本の人口は1億2,700万人。これをピークですよ。やがて2050年になると8,000万人ぐらいになってしまうようです。それで、その半分の6,400万人は、実は三大都市圏に住んでいるのです。東京、名古屋、大阪。ここに住んでいる人が6,400万人。これは私の博士論文のテーマですが、どうやったら地方都市圏に人が張りついてくれるかというのは、難しいです。

いろいろやったのですが、定住条件というのは、大きくは実は二つあります。社会的条件と経済的条件です。私は悲しいかな、建築の出身ですから、社会条件の中の「もの」しか私の貢献できるものはありません。いろいろ突き詰めていくと、定住といっても住民票を移して完全定住をしてくれるというのが一番良いのですが、なかなかそれはうまくいかないということになる。そうすると、定住して転職するとか、部分定住とか、あるいは一時期はやったマルチハビテーションとか、あるいは空き家利用のニューカマーの誘致であるとか、これは国土庁の仕事で随分やりました。群馬県の日航機が落ちた上野村とか、あの辺でも空き家をオープンにして、それで借り手を探してというようなことをやってみました。なかなかうまくいきません。

それでいろいろ考えてみると、やはり定住条件の最たるものは、そこで生業を営んで、お金を稼げるということなのです。つまり経済条件です。だから、雇用機会をつくってやらないと、そう言うては失礼ですけども、どんな環境条件が良くても張りつかない。だから、先ほど藤山先生の発言

の中でとてもおもしろいと思ったのは、世帯類型別に定住してもらおうという話、これはとてもおもしろいと思いました。ただ、問題は世帯類型を想定して、そのときにどういう世帯に対して、どういう職を準備するかというのは、ものすごく私は重要だと思う。だから、市町村長さんの皆様のご発言の中にも、雇用の場を設けるという話がありましたが、ぜひそれを考えていただいて、ニューカマーのための職をつくってやる。欲を言うと、これはトピックス的ではなくて、一般行政として定着するのが一番いいのですが、そこに至るまで、とりあえずしようがないからトピックス的に、こういう成功事例があるのだということをたくさんおつくりになったらいいのではないかと思います。

コーディネーター／

豊橋技術科学大学 大貝教授

ありがとうございました。

5、6分時間がオーバーしてしまいましたけれども、これで「山・住」分科会を閉会いたしたいと思います。

どうもご協力ありがとうございました。